唯だ伯の自信强きに過ぐるや、善言を納るゝの寛容を缺きて、周圍に事ふるものは陰忍の徒にあらざれば則ち諂諛の小人のみ。侃諤の士は或は誅られ、或は踏暇す。若夫れ軍隊主義を謳歌するの甚しき、僧徒を分つに年齢を以てし、中老以上の徒は豫備後備に編入して實務に携はらしめざらんとするが如き、愈此の弊を繁くする者。今や本派の元老耆宿、其他法臘長けたる僧徒の新政に對して不滿を抱ける者所在相接すと傳へらるゝ、決して謂なきに非ず。又其の活動力に富めるや、各種の方面に大規模の企畫を建て、爲めに流石裕福なりし一派の財政をして漸く窮乏の域に陷らしめ、近くは別莊を六甲山上に構へ、ケーブル、カーを山麓に通じて交通に便し、又自ら模範的教育を施すとありて山麓に中學を建て、若くは自由に自己の出版印刷を爲さしめんとて特に活版所を置く等、動もすれば常識外れの企畫をなしつゝ、大谷家の從來費し來れる所亦巨萬に上り、現に百萬に垂とする本願寺派の借財に重ぬるに、大谷一家の負債亦計るべからざるを以てすることあらんか、遠からずして十年以前に於て東本願寺が陷りたると同樣の運命に陷るなきを保せずとは、派

内有識者の齊しく憂ふる所なりと聞く。吾人亦本派本願寺の前途の爲め、又伯大谷光瑞の爲め窃に之を危むもの也。若夫れ傳道者たる法主としての伯光瑞に至つては、彼れの初めより多く欲せざる所、吾人亦多くを期待せざるが故に、近來門信徒中の法主に平かなる能はざる者、京都に本願寺を訪ふを欲せずして、直ちに江州錦織寺なる彼の令弟を拜し、僅に渴仰の至情を醫しつゝありと聞くも、必しも多く憾みとする所以を見ず。(四十四年四月)

淨土宗管長山下現有

現有上人は天保三年生れの當年八十歳、今尙ほ矍鑠として壯者を凌ぐ程の頑健さである。

上人は愛知縣士族青木傳七と云ふ人の次男に生れ、天保十一年、年九歳にして伊勢の國松坂樹敎寺の有譽梧雲に就いて得度を受けた。十五歳の春より江戸に出でゝ增上寺の學寮

に入り、こゝで專ら宗乘を研究し、嘉永二年の冬に至り、時の增上寺住職たりし譽冠僧正に就いて宗戒を承けた。

それから明治七年、年四十一にして淺草なる幡隨院に住職となつたのを初ととし、十二年には尾張海東郡一色村の圓成寺住職となり、同じく二十年には京都なる淨土宗大本山知恩寺に貫主となつた。

間もなく廿三年春に知恩寺を退いてからは、廿六年に長州仙崎村の西圓寺住職となり、三十年に至りて大本山增上寺に榮轉した。時に年六十六。居ること五年にして三十五年五月京都なる淨土宗總本山知恩院の貫主に陞み、同時に淨土宗管長の職に就いて今日に至つた。

その青年時代には非常に困苦を凌いで苦學されたものだと聞くけれども、何しろ今から六七十年前のことで、當時の狀況を知るもの絕えてなく、上人自身は又非常に謙讓な人として、世間の老人達によくある樣な、自分の若い時分の苦勞した樣子を事々しく吹聽するこ

となど決してないので、委しい事は知る由もないが、何でも唯一抔のお粥で一日の飢を凌ぎ、煎豆一升ぎりで一週間位も命を支へなどしつゝ、專心研學に耽つて居られたとか云ふ風の事は、今でも宗徒の間に話柄として傳へられて居る。されば博く內外の學に通じ造詣する所極めて深いことは云ふ迄もなけれど、謙德の深い人とて嘗て知つた風なことを口にさへしたことがないと云ふ。

謙德と云へば上人の人に接すること極めて慇懃なもので、一宗の管長と云つたら兎も角もその宗內の主權者で、門信徒に對しては大變な權威のあるものだが、その門末の僧侶や或は信徒などが謁見を願ひ出た時でも、上人は接見者の室に入り來ると共に、必ず座蒲團から辷り下りて挨拶する。如何なる人にも未だ嘗て此を缺いた事がないとは珍らしい事だ。

上人の行狀には昔の高僧達の傳記でも讀む樣な感じのすることが中々多い。上人は何でも自分の身の廻りのことは他人の手を借ることをせず、着物の出し入れから袈裟衣の保管など、一々手づからされるは未だしも、褌の洗濯、行燈（上人の居間には今日でも常に行

燈を用ゐて居る）の掃除まで、皆な必ず自身でやり、八十の高齢に達せる今日に於ても、未だ嘗て侍者の手を煩はしたことがないと云ふことだ。

上人の無欲恬淡なことは又格別のものである。一體坊さんと云ふものはよく物を貰ふが決して返禮と云ふことをせぬ。所が上人は誰人から如何なる物を貰つても、一を贈らるれば必ず一を返し、十を得れば必ず十を施すと云ふ風で、嘗つて一物も自己の用に供し、若くは貯へて置くと云ふことがない。されば何時になつても極めて貧乏なもので、かつて增上寺から知恩院の門跡に上任した時、上人の荷物として運び込んだもの唯だ一個の柳行李あるのみと云ふ始末であつたと云ふ。

それから未だ增上寺に居た頃、一夜泥坊が上人の居間へ入つて來た。すると上人徐ろに來意を問うて有り合ひの金幾何かを出してやり、「サア他人に見つからない内に出て行なさい」と云うて、自ら庭の切戸へ案内して行つて、近侍の坊さんにも知れない樣にそつと逃がしてやつた。泥棒もこれには餘程恐縮したと見えて、別るゝに臨み「御恩は決して忘れ

ません、之からは心を入れ替へて正業に就き、一廉の者となつたら必ず御禮に參上致します」と云つて行つたとやら。此の事は一山の人々一人も知らずに居たが、後になつて泥棒の忍び入つた場所を發見するに及び、初めて事の次第が分つたと云ふ。

上人は壯年の頃不治の難病たる肺病に罹つたが、その嚴正なる攝生法と、熱烈な信念との力は何時しか病を擊退して、以來今日まで曾つて藥餌に親んだことはない。その日常は念佛三昧で、生活の素樸な事は驚く程なものだ。何でも朝夕は牛乳二合づゝ、晝は粥一碗、これが常食で、その外には一切飯と云ふものは喰べぬと云ふことだ。これで身體が保てゝ、而も人並外れた健康と長壽とを得られたかと思ふと寧ろ不思議な位だ。

上人の威儀嚴正なことも亦珍しい。居常苟くも直立不動の姿勢を崩すことなく、頽齡八十の老軀を以て、五六時間に亘る大法要にも終始嚴然として一寸の身動きさへもせぬ。それで格別疲勞倦怠の色をも見せぬと云ふのだから驚く。

因みに上人が靑木家に生れて山下の姓を冒すに至つた謂は斯だ。上人昔增上寺に居て學

寮の寮主となり、これを現有寮と名けたものだが、其の寮が増上寺山内の山下谷にあつたと云ふ所から、之を其儘とつて自分の姓にしたのだと云ふ。（四十四年四月）

富と兩親と親戚と肉身の快樂とよりも遙に大なるものは眞理なり。故に是等を棄てゝ眞理に從ふべし。

—巴利文雜阿含經

第六附篇

歴代内閣交迭史

明治十八年十二月内閣官制實施以來、今日に至る迄、内閣の交迭せるもの十九次。その間内閣に首班たりしもの凡そ十人、大臣職に就きたるもの無慮百〇七人。今夫等を年代順に一括して左に表示す。上級、某々内閣の下に記せる數字は、該内閣の成立より崩壞に至る迄の年月、同一内閣中にて大臣更任の場合、後任者の右肩に附記せる數字はその更迭の年月なり。

内閣	外務	内務	大藏	陸軍	海軍	司法	文部	農商務	遞信
(1)伊藤内閣 一八年三月一二—一年四月	井上馨 二〇、九 伊藤博文（兼任） 二、二 大隈重信	山縣有朋	松方正義	大山巖	西郷從道 九、七 大山巖（兼任） 二〇、七 西郷從道	山田顯義	森有禮	谷干城 一、九、三 一ノ瀬從道 一九、七 山縣有朋 二〇、七（兼任） 土方久元 二〇、九 黑田清隆	榎本武揚
(2)黑田内閣 二、四—二、二、二、二〇、内大臣三條實美臨時兼任首相）	大隈重信	山縣有朋 二、二、二 松方正義（兼任） 三、二〇 山縣有朋	松方正義	大山巖	西郷從道	山田顯義	森有禮 二、二、二 大山巖（兼任） 三、三 榎本武揚	榎本武揚 二、二、七 井上馨（兼任） 三、二、一〇 岩村通俊	榎本武揚 二、二、三 後藤象二郎
(3)山縣内閣 二、二、二—二 四、五	青木周藏	山縣有朋 二、二、五 西郷從道（兼任）	松方正義	大山巖	西郷從道 二、三、五 樺山資紀				
(4)松方内閣 二四、五—二 五、八	青木周藏 榎本武揚	西郷從道 二四、六 品川彌二郎 二五、三 副島種臣 二五、六 松方正義（兼任） 二五、七 河野敏鎌	松方正義（兼任）	高島鞆之助	樺山資紀	山田顯義 二四、六 田中不二麿 二五、八 河野敏鎌（兼任）	芳川顯正 二四、六 大木喬任	陸奥宗光 二五、三 河野敏鎌 二五、六 佐野常民	後藤象二郎
(5)第二伊藤内閣 二五、八—二 九、九 二九、八 遞相黑田清隆臨時兼任首相）	陸奥宗光 二、八、六 西園寺公望（兼任） 二九、四 陸奥宗光 二九、五 西園寺公望（兼任）	井上馨 二、七、一〇 野村靖 二九、二 芳川顯正（兼任） 二九、四 板垣退助	渡邊國武 二、八、二 松方正義 二八、六 渡邊國武	大山巖 二、七、九 西郷從道（兼任） 二八、三 山縣有朋 二八、五 大山巖	仁禮景範 二、六、三 西郷從道	山縣有朋 一、六、三 伊藤博文（兼任） 二、六、三 芳川顯正	河野敏鎌 二、六、三 井上馨 二七、八 西園寺公望	後藤象二郎 二、七、一 榎本武揚（新設）拓殖務大臣 二九、三 高島鞆之助	黑田清隆 二、八、三 渡邊國武 二八、一〇 白根專一

第二 (6)松方（松隈）内閣 三一、九、一三	大隈 重信 三一、一一、二 西園寺公望	樺山 資紀	松方 正義（兼任）	高島鞆之助（兼任） 三〇、九 高島鞆之助	西郷 從道	清浦 奎吾
第三 (7)伊藤（博文）内閣 三一、八、一二 一、六、一三	西園寺公望	芳川 顯正	井上 馨	桂 太郎	西郷 從道	曾禰 荒助
(8)大隈（重信）内閣（憲政黨） 三一、一一、一 一、二、六、一三	大隈 重信（兼任）	板垣 退助	松田 正久	桂 太郎	西郷 從道	大東 義徹
第二 (9)山縣内閣 三三、一一、一〇 三三、一二、一〇	青木 周藏	西郷 從道	松方 正義	桂 太郎	山本權兵衛	清浦 奎吾
						樺山 資紀
						曾禰 荒助

第四 (10)伊藤（政友會）内閣 三三、一〇、一三 三四、六、六（三四、五、樞密院議長兼任）	加藤 高明	末松 謙澄	渡邊 國武 三四、五 西園寺公望（兼任）	桂 太郎 三三、一二 兒玉源太郎	山本權兵衛	金子堅太郎
(11)桂 内閣 三四、六、一三 九、一、一	曾禰 荒助（兼任） 三四、九 小村壽太郎	内海 忠勝 六、七 兒玉源太郎（兼任） 三六、一〇 桂 太郎（兼任） 三七、二 芳川 顯正 三八、九 清浦 奎吾（兼任）	曾禰 荒助	兒玉源太郎 三五、三 寺内 正毅	山本權兵衛	清浦 奎吾 三六、九 波多野敬直
(12)西園寺内閣 三九、一、一四	加藤 高明 三九、二 西園寺公望（兼任） 三九、五 林 董	原 敬	阪谷 芳郎	寺内 正毅	齋藤 實	松田 正久 四一、三 千家 尊福
						松田 正久
						林 有造
						星 亨 三三、一二 原 敬
						芳川 顯正
						松岡 康毅
						山縣伊三郎 四一、一 原 敬
						堀田 正養 四一、三（兼任）

四八(13) 桂二	閣(14) 西園寺	内閣	大(15) 正元	菊三	内閣	山本	内閣
寺内	林	内田	桂	牧野	伸顯	原	
小村壽太郎	兼任 正毅	兼任 薫	内田	加藤	高明	大浦	兼武
平田	東助	桂	山本	若槻禮二郎	木越	安綱	齋藤
兼任 太郎	寺内	正毅	石原	新六	勇作	齋藤	實
寺内	正毅	齋藤	實	松田	正久	長谷場純孝	牧野
岡部	長職	小松原英太郎	大浦	兼武	後藤	新平	薫

三(17) 第二	大隈	内閣	加藤	高明	大隈	兼任 重信	若槻禮二郎
武富	時敏	大隈	健一	加藤友三郎	尾崎	行雄	高田
早苗	河野一	廣中	兼武	後藤	新平	原	牧野
伸顯	林	田	健治郎	山本	清雄	元久	田
卯太郎	兼任 重信	兼武	若槻禮二郎	岡田	平沼	阿部	米内
東條	小磯	鈴木	東久邇宮	幣原	吉田	鳩山	石橋
岸	池田	佐藤	三木	大平	福田	大平	鈴木
中曾根	竹下	宇野	海部	宮澤	細川	羽田	村山
橋本	小渕	森	小渕	森	小泉	安倍	福田
麻生	鳩山	菅	野田	安倍	福田	麻生	鳩山

○因に歴代内閣をその命數の長短により序列すれば概れ左の如し。

内閣	成立	崩壊	存續年月
第一次桂内閣	三四年六月	三九年一月	四年七ヶ月
第二次伊藤内閣	二五、八	二九、九	四年一ヶ月
第二次桂内閣	四一、七	四四、八	三年一ヶ月
第一次西園寺内閣	三九、一	四一、七	二年六ヶ月
第二次大隈内閣	三、四	五、一〇	二年六ヶ月
第一次伊藤内閣	一八、一二	二一、四	二年五ヶ月

第二次山縣内閣	三一、一一	三三、一〇	二年
寺内内閣	五、一〇	七、八	一年十ヶ月
第一次山縣内閣	二二、一二	二四、五	一年六ヶ月
黒田内閣	二一、四	二二、一二	一年四ヶ月
第二次松方(松隈)内閣	二九、九	三一、一	一年四ヶ月
第二次西園寺内閣	四四、八	四五(大正元)、一二	一年四ヶ月
第一次松方内閣	二四、五	二五、八	一年三ヶ月
山本内閣	二、二	三、四	一年二ヶ月
第四次伊藤(政友會)内閣	三三、一〇	三四、六	八ヶ月

第三次伊藤内閣	三一、一	三一、六	五ヶ月
第一次大隈（憲政黨）内閣	三一、六	三一、一一	五ヶ月
第三次桂内閣	元、一二	二、二	二ヶ月
平均			一年十ヶ月

○

これを通觀するに、最も多く最も長く内閣を占領したるものは長氏にして、既往十八次内閣中彼等はその十に居り、これを年月にすれば前後三十二年八ヶ月（内閣官制實施の明治十八年十二月より、寺内々閣崩壞の大正七年七月に至る）中、實に二十一年二ヶ月の長きに亘る。就中伊藤の内閣を組織すること四回八年、桂の三回七年十ヶ月、山縣の二回三年六ヶ月。他は最近の寺内々閣（一年十ヶ月）あるのみ。桂が内閣壽命の最長（四年七ヶ月）と最短（二ヶ月）とに居り、最後の長氏内閣と思はる寺内が恰も内閣の平均壽命（一年十ヶ月）を保ちたるなど、奇也。

爾余八次の内閣中、その半を占むるもの薩氏にして、卽ち松方の二回二年七ヶ月、黑田の一回一年

四ヶ月、山本の一回一年二ヶ月、計五年一ヶ月を占む。他は西園寺の二回四年一ヶ月、大隈の二回二年十一ヶ月。この最後の二者を半政黨内閣とすれば、約三十三年中、僅に七年だけが政黨臭き内閣の占むる所にして、爾餘の二十三年間は純然たる藩閥内閣の時代なりしを見るべし。

○

これを個人の上より見るに、この三十三年間十八回の内閣には少くとも百六十二人の平大臣が出來て居なければならない筈なるに、實際大臣職に就けるものは通じて百七人に過ぎざるが故に、それだけ同一人にて幾回も大臣になつたものが多くなければならぬ譯也。この點では桂の十一回が最も多い樣也。それは勿論臨時兼攝の場合をも入れての話なるか。總理が三回陸軍が四回、外務、内務、大藏文部が各一回。次は松方の十回にして、それは本職の大藏が六回、總理が二回に内務が二回。伊藤に至つては、兼攝の場合の外には平大臣になりしこと一回もなし。山縣は二回總理の外に内務に三回、陸軍、司法、農商務に各一回にて計八回、大山は陸軍專門だけにそれが五回の外には海軍、文部が一回づゝ。西郷は　海軍が六回に内務が二回、陸軍、農商務が一回づゝ。元老格で一番少きは井上にして外務二回、大藏、農商務の一回づゝのみ。樺山も海軍二回の内務、文部各一回づゝ也。

人名索引

A

荒井賢太郎 六五、一〇〇
足立綱之 六九
安樂兼道 七二、八二、一三九、一八五、一九六
荒井泰治 九三
秋山定輔 九五
安達峰一郎 一〇〇
荒川義太郎 一八六
秋元興朝 一八五、一九一、三〇一
阿部浩 一八五、一九一、
有地品之允 二一九
青木周藏 二八二
淺川敏清 四三九
有賀長雄 四六四、四九四、五〇〇
湯美契緣 四七七、五四一
青木徹二 五〇九、五一一

B

ボアソナアド 四八、四九四
ビュッヘル(アーノルド) 九一
ブッセ 三〇四
ビスマルク 四九八

C

チャーチル 六三
クルーム・ロバートソン 三〇四
クラーク 三〇五

E

江木衷 二〇七、四九五、五〇〇、五〇九
江藤新平 三五一

F

福原鐐次郎 一〇四、五三三
福澤諭吉 二五八
フルベッキ 二八〇
古市公威 四一六、四二〇
二上兵治 四六一
藤井宣正 五四四
福田靜處 五五〇
福地櫻痴 六〇〇、六〇六

G

後藤新平 四一、九〇、一八五
後藤象二郎 二六三、三一八
ゲリーノー 三〇五
ゲナイスト 四九七

H

原敬 一一、四一、一七〇、一九二、三六一
星亨 四七、一八九
長谷場純孝 五六、六一、二四五、三一七、三五〇、五二一
橋本圭二郎 六五
堀田正養 六八、三一〇
平田東助 七五、一八六
平山成信 一三三
平岡浩太郎 一七四
土子金四郎 二〇八
平沼淑郎 二〇六
土方久元 二一六、二二一
ヘボン 二八〇
早川鐵冶 二八二
廣橋兼光 三一二
林有造 三一八

林田龜太郎 三七六
鳩山和夫 三七八、三八一
鳩山春子 三八一、三八七
萩野末吉 四三九
積積八東 四五六
堀江歸一 五一四
原嘉道 五一四
濱尾新 五二三、五二六
北條時敬 五三七
堀切善兵衛 五八九
林毅陸 五九一

I

伊藤博文 五二、一一八、一二四、二一六、二一九
井上馨 二四、五二、二二〇
石本新六 二八、四一五、四三八、四四三
伊東巳代治 六一、一五九
一木喜德郎 五五、六二、四六三、四六四
石黑忠悳 九五
伊東院彥吉 一四七、一五二
市來乙彥 一五四
岩倉具視 一七〇、二一八
岩倉具定 二一七、二二八
板垣退助 三一七
犬養木堂 三二三、三二九、五八八
市村光惠 四六四
井上密 四五九、四六四
伊澤修二 四七五
磯部四郎 四九四
井上毅 四九八
岩村通俊 五二一
井口在屋 五三二
石川舜台 五四一

K

桂太郎 二〇、三四、五三、七五、一一一、四〇九
清浦奎吾 三七、四五、七五、一七六
木越安綱 五五、一〇九、四三一、四五一
金玉均 六七
川上親晴 六九、一四一、一八七
川路利良 七二、八六
小村壽太郎 三八、七五、一六九
菊地大麓 七五、五三五
久保田讓 七五
小松原英太郎 七六、三七一、五二四
兒玉源太郎 七六、九五、四三九
加藤高明 八四、一一〇、三八六
川村純義 八七
川村純藏 一五二、一五四
樺山資紀 一二八、三六八、四八三
樺山資英 三一一
樺山愛輔 一五四
川上操六 一六一、四一七、四四九、五四三
龜井英三郎 一八五
金子兼太郎 一八五、一九二
古賀廉造 八五、一九二
神鞭知常 一九四
久米金彌 二〇七
米田虎雄 二一九
川田小一郎 二六〇、二六三、二八三
加藤正義 二六四
勘解小路資承 三一二
小寺謙吉 三二一
河野廣中 三二二
工藤行幹 三七五
河島醇 三七五
倉知鐵吉 三八六
黑澤源太郎 四一八

河合操 四三九
金井延 四六一
河野敏鎌 四七六
清澤滿之 四七七、五四六
菊池武德 五一二
小山完吾 五一二、五九八
神戸寅次郎 五一四
岸清一 五一四
加藤正雄 五三二
久原躬弦 五三五

L

ロイド・ヂョオヂ 六三
ライマン・アボット 一七七
ラーバンド 四九七

M

松方正義 五三、八七
松室致 五五、五七
マツケナ 六三
水町袈裟六 六五、一〇一、一三三
三島通庸 七二、三〇一
水野錬太郎 一〇四
三浦觀樹 一〇六
牧野伸顯 一二九、一三四
三島彌太郎 一五四、三〇一
松方巖 一五四
松田秀雄 一八九、二一一、二四八
箕作秋坪 二〇六
箕作元八 二〇六
萬里小路博房 二一六
村田新八 二一九
森有禮 二七九
前田正名 二八〇

松尾臣善 二九二
箕浦勝人 四三二
松田正久 三三七、三四九、三七七
元田肇 三七七
マックスウエル 三九九
村田惇 四二三
美濃部達吉 四五六
眞野文二 五三二
正岡子規 五四八
村上專精 五四七

N

長岡外史 二二、四三二、四三七
中小路廉 五五、六七、九六、一八五
長森藤吉郎 六八
長與專齊 九五
中村純九郎 一三三
內貴甚三郎 一八九
中野武營 二〇〇
中島行孝 二〇〇
中御門經之 二一六
野田卯太郎 三七七
乃木希典 三九七
ネポカドフ 四〇一
中村雄二郎 四一八
野津道貫 四四六
中田薰 四六三
名取弘作 五一二、五一四
南條文雄 五四七、五五七

O

大隈重信 二一、二三〇、三四六、三八二、四四〇
岡市之助 二二、四三五
大浦兼武 四一、七〇、八五、一三六

尾崎行雄 六三、九六、二一一、三一七、三三八、三六五
岡部長職 七六、三一〇
岡崎邦輔 八六
大島久滿次 九三
大久保甲東 一三五
大久保利武 一三七、一四三
押川則吉 一四四
奥田義人 一九三、二〇七、五〇〇、五二四
大石正己 一九四、三二二、三五六
岡田良平 三七一、四八七、四三二、五三五
太田三次郎 四一七
大庭二郎 四三九
大木喬任 四七五
大谷光瑞 五四一
大谷光演 五四一
大谷尊寶 五四四
大谷光瑩 五四一
大谷光尊 五四四

P

ポアンカレー 六三

R

リース 三〇四

S

西園寺公望 二〇、二九、七八、一一九、二二四、二三九、二五六
澁澤榮一 二四、二〇八
替糊荒助 四四
柴田家門 五五、五九、九三、一〇五
西郷從道 一五八、四二六
櫻井鐵太郎 六五
齋藤實 八四、四二六
杉山茂丸 九五

酒匂常明 一四六
杉浦天台 一七四、四七四
阪谷芳郎 一八三、一八五、一九四
千家尊福 一八五、一九六
坂本彭之助 一八六
七里清介 一八九
添田壽一 二〇二
阪谷希八郎 二〇六
西郷隆盛 二一九
島義雄 二一九
三條實美 二二一
末松謙澄 二八〇
ストラーテン 三〇二
相良頼紹 三一二
島田三郎 三二四
ステッセル 四〇〇
鮫島重雄 四三二
副島義一 四六四、五〇九、五一五
清水澄 四五九
澤柳政太郎 四七一、五三六
シュルツェ 四九八
品川彌二郎 五二〇
櫻井錠二 五二三、五二六、五三五
瀨戸虎記 五三二
幣原坦 五三二
薗田宗憲 五四四

T

田中義一 二〇、四三五
寺内正毅 二〇、三九、四六、四一八
高橋健三 六一
塚田達二郎 六六
高崎親章 七一

田尻稻二郎 一〇一、一五三、二〇二
都築馨六 一〇五
高島鞆之助 一二八、一三一、四四四
床次竹二郎 一二九、一四七、一八五
角田眞平 一八五、一八八
鶴原定吉 一八五、一八九、一九三
田村太平 一八九
棚橋一郎 二〇八
德大寺實則 二一六
堤正誼 二一九
田中光顯 二一六、二二五
富田鐵之助 二七五、二八二
田島晴雄 二八二
チーグレット 二八三
武富時敏 三二四、三三四
東郷平八郎 三九七
玉木文之進 四〇八
東條英敎 四一八、四四六
財部彪 四四六
外山正一 四七五、四八二
辻新二 四七六
竹笠清太郎 五二二
建部遯吾 五二九
戸水寛人 五二九
竹內栖鳳 五五〇

U

內田魯庵 四四
上原勇作 二〇、二六、四一八、四三二、四四三
宇佐川一正 二二
內田康哉 六三
內海忠勝 七五
內田嘉吉 九三
植村俊平 一八六

上杉愼吉 四五六
浮田和民 五〇九
內丸最一郎 五三二

W

渡邊國武 五二、三九〇
若槻禮次郎 五五、六四、一〇〇
鷲尾隆聚 二二四
渡邊昇 二二五
渡邊千秋 二二六、二三〇、二三一

Y

山縣有朋 二〇、四四、七七
芳川顯正 四四
山本達雄 五六
安廣伴一郎 六一
山縣伊三郎 六八、二〇五
山本權兵衛 八八、一一〇、一二八、一三二、一五五、四二六
安場保和 九五
山座圓次郎 一〇四
橫井時敬 一四九、一六九
山內一次 一三三、一五〇
吉井友兄 一五四
山內滿壽治 一六五
安岡敬一郎 一七四
山下重威 一九〇
吉井友實 二一九
矢野文雄 二三六
山地元治 四〇九
山川健二郎 四七、一四八、五二六
山內老慕 四九四
山田一郎 五二、
山田喜之助 五二、
山下現有 五五九
有馨梧雲 五五九

時の人・永遠の人 終

時の人永遠の人…奥付

正價金貳圓六拾錢

大正九年七月十日印刷
大正九年七月十八日發行

著者　南木性

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地
發行者　株式會社博文館
代表者　大橋進一

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷者　川崎佐吉

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷所　川崎活版所

發行所　東京日本橋區本石町三丁目　株式會社博文館

（不許複製）

文學士 下田禮佐
石井逸太郎 共著

參考

日本地理

本書は各中等學校生徒及小學校教師の參考に資せん目的を以て編纂せしものにて其の内容は半は地文、半は人文を説き殊に統計に至りては校正中改めたるものすらありて最新の正確なる材料に據れり尚處々に著者自身の旅行記を挿入せるは又一の特徴とする所なり。

菊判洋製美本
紙數三百九拾餘頁
正價貳圓貳拾錢
郵稅金拾二錢

株式會社博文館

參考

日本歷史

廣島高等師範學校教授 文學士 長沼賢海先生著

本書は從來公にせられたる比較的新らしい幾多の日本通史と、大學に於ける諸先生の講義を經とし、更に著者が多年の蘊蓄と教授上の經驗を緯として參照し考覈し克く探り深く究め、幾多の苦辛を重れて完成せるものにして中等學校在學中の生徒、又は卒業生が、日本歷史の豫習、又は復習用の參考として、最適當なるは、勿論國史を究めんとする人の絶好資料たるを信じて普く江湖に薦む。

菊判洋製美本
紙數五百六十頁
正價貳圓四拾錢
郵稅金拾二錢

株式會社博文館

其日庵杉山茂丸著

桂大將傳

■この書は僅かに百廿石取りの馬廻りの家から出て、それからそれと鰻上りに■昇進して位人身の榮を極めた桂公の傳記である。公の誕生から少年青年時代■を經て武人たり政治家たりし公私の一生涯を遺憾なく詳叙してある。明治中■興の生んだ偉人の風貌に接せんとする人達に薦める。

四六判全一冊洋裝函入
定價壹圓八拾錢
送料拾二錢

兒玉大將傳

■此の書は著者が最も崇敬する處の兒玉大將の性格より説て大將前代無比の大■事業を敢行し最後に我が帝國の東洋に於ける安危存亡の大難關を斬拔けたる■偉勳を精叙して巨人の風丰ゐ躍如たらしむ。

四六判全一冊洋裝函入
定價壹圓六拾錢
送料八錢

株式會社博文館

大僧正本多日生師著

日連主義戰士の伴侶

■日次概要

■黒想問題と日連主義■宗教信仰の要義■法華經の五大要義■本尊の要義と其歸結■信行の要義と其歸結■得益の要義と其歸結■佛教人身觀の概要■佛教倫理觀の概要の八大篇にして其記述極めて懇切なり。

四六判全一冊洋裝函入
定價貳圓貳拾錢
送料八錢

國民教化

■本書は『法華の』姉妹篇なり。今や民心動搖の兆あり。國民教化の緊要なるは■論なし、著者各地に民力涵養の講演を爲すに際し、其蘊蓄を傾盡せしもの本■書を讀まむ人、之に由つて國光教化と佛教との關係を會得するに至らば豈單■り著者の喜びに止まらんや。

四六判全一冊洋裝函入
定價貳圓貳拾錢
送料八錢

株式會社博文館

土井晩翠二大快著

詩篇

天馬の道に

全一冊新形函入表裝高雅美本
正價 壹圓四拾錢 郵稅 八錢

南歐飛來珍客「生けろ英雄の詩」の讃辭□日本の自然と美術とを歌ふ□大戰以來の世界の大勢を詠ず□東亞の時事思潮を歌ふ□東西文明の融合を說く□東洋の文藝印度聖經の讃頌□伊太利大天才ダンテ、レオナルド、ミケラジエロ、ラハエル、□現代の混沌將來の光明を歌ふ等首尾一貫の一大雄篇著者在來一切の作に優りて絢爛雄麗壯重を極む。

晩翠詩集

全一冊新形函入表裝高雅美本
正價 貳圓 郵稅 八錢

「暮鐘」「星落秋風五丈原」「黑龍江上の悲劇」等人口に膾炙せられ殆んど國文學上のクラシックたるもの此集中に在り。「セイヌ江上の別離」「カムパニヤの懷古、南歐メシナの詠懷等著者の特色を發輝したる此集に在り。雄大壯麗天風海濤の韻は、玆に始めて讀者に供せらる。

株式會社博文館

今泉雄作著

繪畫の見方

新形洋裝函入
正價金壹圓五拾錢
送料八錢

本書は美術品の鑑識に於て當代の權威たる著者が殊に其最も得意とせる繪畫に對して滿幅の蘊蓄を傾盡せるもの、所說剴切適確にして以て古來の繪畫に通ずべく、以て其優劣を判ずべく、況んや眞質の鑑別法法に至つては、本書出でゝ初めて其六韜三略を得たりといふべし。江湖同好の士に薦む。

秋山四郎著

揮毫便覽

新形洋裝函入
正價金壹圓貳拾錢
送料四錢

株式會社博文館

ATZW-30

増補縮刷

樗牛全集

樗牛歿して既に十餘年、世界に於ける帝國の權與も文明に對する國民の思想も、また一般社界の風潮も殆んど全く一變して隔世の感あるが如くなるにも拘らず、其の論義は救世の光を以て讃仰され、其の文藻は典雅を以て愛誦され學に志し文藝に意ある青年の指針とし伴侶として同情ある警世の聲をして讀まざるを恥づる所以のものは何ぞや至誠眞摯を以て達觀せる意志感情を天稟の才筆に託し奮勃たる英氣を遺憾なく表現したるに依る。茲に增補縮刷全集成りて「吾人は現代を超越せざるべからず」と努力し「文は人なり」と云ひし樗牛が人格のいよいよ焔々として常に日月の如く時世の上に輝くを見る。現代批判の標準として敢て江湖の一讀を望む。

嘲風・芥舟・臨風・愚佛 共編
文學博士 高山林次郎 遺稿

全部六冊完著

1 美學及美術史
2 文學評論
3 史論及史傳
4 時論及思索
5 想華及小品
6 日記及消息

三六判洋製特製函入
正價 貳圓八拾錢
各冊 送料各拾錢

株式會社 博文館

384
225

終